PRESS RELEASE

福岡アジア美術館では、2027 年秋にアートを通じてアジアの「いま」と出会う国際展「アートアジア福岡 2027（通称 ART ASIA）」を開催します。ぜひ貴媒体にてご紹介いただきますようお願いいたします。
今後、追加アーティストや展覧会詳細を順次発表してまいります。

福岡アジア美術館
2026 年 11 月 12 日

アジアの「今」を、アートを通して体験する 3 か月間
「アートアジア福岡 2027（通称：ART ASIA）」開催

アジアを代表するアーティスト約 15 組が福岡に集結
まち全体を舞台に、市民とともにつくる国際展

福岡市では、「Fukuoka Art Next」の推進を通じて、市民が日常の中でアートに触れ、創造性や多様な価値観に出会うことができる環境づくりを進めてきました。その一環として、アジア美術館でも 2023 年より、コレクション展示を企画展としてバージョンアップし、2026 年には、年間を通じてアジア全域を紹介する「アジア美術の歩き方」シリーズを開催しております。

本展は、「Fukuoka Art Next」によるアートの振興に注力してきた福岡市が、アジア美術館の活動の蓄積を活かし、国際的に活躍するアジアのアーティストを招聘して開催する、大規模な現代美術展です。アジアのアーティスト約 15 組の作品を通じて、アジア現代美術の最新動向をご紹介します。美術館を飛び出してまちなかへも展開。都市そのものを舞台に、アートとの新たな出会いを創出します。

■開催概要

展覧会名　アートアジア福岡 2027
会　　期　2027 年 9 月～12 月（予定）
会　　場　福岡アジア美術館、天神周辺ほか

■展覧会の特徴

1. アジアの「いま」に触れる
アジアの「いま」が福岡に集結。作品を通して、社会、経済、環境、労働など、アジア各地が抱える課題を見つめ、福岡から未来を展望します。

2. まちが、美術館になる
天神のまちなかにアート作品を展開。
普段の生活や買い物、通勤・通学のなかで、思いがけずアジアの現代アートと出会うことができる空間をつくります。

3. アーティストとともにつくる
アーティストと来場者が交流する参加型プログラムを展開します。作品制作のプロセスを共有し、見るだけではない「参加する国際展」を目指します。

【本リリースに関するお問い合わせ】
福岡アジア美術館大規模国際展実行委員会
事務局：福岡アジア美術館 学芸課 金子・中尾、運営課 鴨川・下川
TEL：092-263-1100／FAX：092-263-1105

＜主な参加予定アーティスト＞

イムラン・クレシ／Imran Qureshi
1972 年、ハイダラーバード（パキスタン）生まれ
ラホール（パキスタン）在住



現代社会が抱える様々な問題を織り込みながら、伝統的な細密画を現代美術として切り拓いてきたアーティスト。イスラームの美意識をベースにしながら社会へ鋭い批判的考察を投げかける作品は、細密画にとどまらず大規模なインスタレーションにも展開し、パキスタンを代表するアーティストの一人として国内外で活躍。ラホールにある国立美術大学で教鞭をとり、後進の育成にも尽力している。

■主な展覧会歴
2025 年「イスラミック・アーツ・ビエンナーレ」ジェダ、サウジアラビア
2024 年「Home」COMO Museum of Art、ラホール、パキスタン
2018 年「ラホール・ビエンナーレ 01」パキスタン
2016 年「Other States, Other Lives, Other Souls」Corvi-Mora、ロンドン
2013 年「The Roof Garden Commission: Imran Qureshi」The Metropolitan Museum of Art、ニューヨーク




左：展示風景「Home」2024 年
右：《Opening Word of This New Scripture》2025 年

ミット・ジャイイン／Mit Jai Inn
1960 年、チェンマイ（タイ）生まれ
チェンマイ（タイ）在住



色彩と身体的な行為を通して絵画の概念を拡張し、社会や政治、公共空間との関係を問いつづけてきたアーティスト。
1992 年には「Chiang Mai Social Installation」を共同設立し、アートを人々の交流や社会的な実践の場として捉える活動を展開。鑑賞者が作品に触れ、参加し、他者と関わることを促す交流型の作品を制作し、現在もチェンマイを拠点に国際的に活躍している。

Photo: Dave Warren ©Ikon Gallery

■主な展覧会歴
2024 年「第 11 回アジア太平洋トリエンナーレ」ブリスベーン、オーストラリア
2022 年「国際芸術祭 あいち 2022」愛知
2021 年「Dreamworld」Ikon Gallery、バーミンガム、イギリス
2018 年「第 21 回シドニー・ビエンナーレ」オーストラリア
2017 年「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980 年代から現在まで」森美術館・国立新美術館ほか、東京




左：《Patch Work 2》2019 年 Photo: Stuart Whipps ©Ikon Gallery
右：《Dream Tunnel》2021 年 Photo: Stuart Whipps ©Ikon Gallery

チョン・ユギョン／Jong Yu Gyong
1991 年、兵庫生まれ
福岡在住



2017 年よりソウルを拠点に活動していたが、2018 年の韓国兵役法改正により韓国に住みつづけると徴兵対象になることから、2020 年末に日本へ帰国。現在は福岡を拠点に活動している。
作品では朝鮮人の「移動」の歴史を検証し、恣意的に引かれる「境界線」や戦争と文化の関係性に問いを投げかけてきた。近年は、有田焼や大村収容所の歴史を調査しながら、絵画や陶磁器などの作品を発表している。

Photo: Hirohito Yamaguchi

■主な展覧会等
2025 年「KKWANG! 꽝!」EUREKA、福岡
2024 年「OMURA-yaki」春陽堂&AGITO、佐賀
2023 年「Homemaking #2」武蔵野プレイス、東京
2023 年「福岡アートアワード 2023」優秀賞、福岡
2019 年「VOCA2019」奨励賞、東京





左：《OMURA-yaki #3》2023 年 Photo: Yuki Moriya
右：《隔たるほどに、繋がりを知る》2025 年 ©2025 EUREKA

ジャン・マヨ／Jan Mayo
1991 年、マニラ（フィリピン）生まれ
マニラ（フィリピン）在住



肖像、アイデンティティ、そして人と自然との関係を探求する写真家。商業写真をはじめ、フィリピン国立博物館や東京大学総合研究博物館、小石川植物園などでのプロジェクトまで幅広い活動を展開。植物学者との協働によるポートレートシリーズ《Faces & Flora》などを制作した。近年は、文化交流や異なる知識体系の対話を促すメディアとしての写真表現を追求している。

Photo: Eli Dagli

■主な展覧会等
2026 年「Winston Taylor Photo Prize」National Portrait Gallery、ロンドン
2025 年「植物顔―日本・フィリピンの草木花実写真」インターメディアテク、東京
2024 年「Faces and Flora: Philippines Native Plant Photography Exhibition」National Museum of the Philippines、マニラ
2024 年「FOTOMOTO: Time Bubble」Finale Art File、マニラ
2023 年「Fujifilm GFX Challenge Grant Program 2022」優秀賞、東京





左：《Rhododendron weyrichii》2025 年
右：《Drag Queen in Waiting》2025 年

シエ・ヨーツェン（謝佑承）／Hsieh Yu-Cheng
1992 年、宜蘭（台湾）生まれ
新北（台湾）在住



光や空間、ものの見方を形づくるイメージのメカニズムを探求する台湾出身のアーティスト。蛍光塗料や光を用いたインスタレーションを制作し、現実と虚構、デジタルとアナログ、存在と不在といった相反するものの境界を問い直してきた。ギャラリー空間から屋外での展示まで、鑑賞者の視覚や身体感覚を揺さぶる幅広い作品を作り出している。

■主な展覧会等
2025 年「Residency Project: Golden Shadow」18th Street Arts Center、ロサンゼルス、アメリカ
2025 年「WE ARE ME」基隆美術館、台湾
2024 年「Shadow is the Light — Taiwan International Light Festival」国立台湾美術館、台中
2023 年「Methods」Absolute Space for the Arts、台南、台湾
2022 年「Fever Screen」Digital Art Center、台北





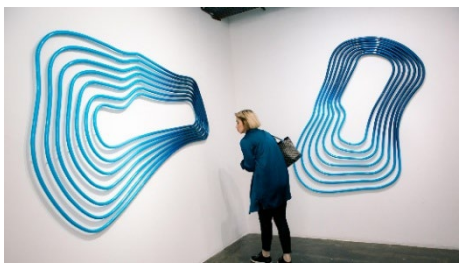
左：《High Voltage》2021 年（Chung-Yuan Wang との共同制作）Photo: Urban Art Studio
右：《Cyclorama》2023 年 Photo: Anpis Wang

マハラニ・マンチャナガラ＆ヌラフマット・ウィディヤセナ／
Maharani Mancanagara & Nurrachmat Widyasena
マハラニ：1990 年、パダン（インドネシア）生まれ
ヌラフマット：1990 年、キッチナー（カナダ）生まれ
バンドン（インドネシア）在住



記憶、テクノロジー、そして想像上の歴史の関係性を探るような作品を制作するアーティスト・デュオ。インドネシアのバンドンを拠点に、それぞれが国内外で独自の活動を展開。それゆえ固定された共同制作のスタイルやアイデンティティを持つのではなく、特定の問いや場所、時間の中で生まれる出来事に応答するかたちで協働している。

■主な展覧会等
2026 年「Object and The Politics of Presence」Tumurun Private Museum、インドネシア［マハラニ］
2025 年「Tiba Tanpa Berangkat (Departing Without Arriving)」D Gallerie Jakarta、インドネシア
2025 年「On The Edge I See Yellow」Warin Lab Contemporary、バンコク［マハラニ］
2025 年「黄金町バザール＋上大岡バザール 2025」横浜［ヌラフマット］
2024 年「Alternate Reality」New Art Museum、シンガポール





左：Nurrachmat Widyasena
《Jembatan Einstein-Rosen #3, #4》2019 年
右：《Tiba Tanpa Berangkat》（部分）2025 年